NPO法人 長崎史談会

長崎学レポート

第18号
2025年5月1日発行
長崎学レポート
編集委員会
〒850-0861
長崎市江戸町5-8
第5一ノ瀬中央橋ビル

2024年度　第４回公開講座 2024年12月16日 ・ 第５回公開講座 2025年１月18日

第四回長崎学公開講座 第一部発表要旨

春徳寺とその歴史

原田　博二

一、春徳寺

春徳寺（華嶽山、臨済宗建仁寺（黄龍）派）は、寛永七年（一六三〇）泰室清安によって岩原郷に開創された。

最初、大梅山春徳寺と命名されたが、寛永一七年（一六四〇）長崎代官末次平蔵茂貞の援助によって現在地に移転、山号も初代平蔵政直の法名華嶽にちなんで華嶽山と改めた。

以後、禅林寺（河東山、臨済宗妙心寺（楊岐）派、寺町）とともに長崎における臨済宗の寺院として現在に至っている。

春徳寺（長崎市夫婦川町）

二、末次平蔵家

末次家は、元和五年（一六一九）初代平蔵政直以来、二代平蔵（平左衛門）茂貞、三代平蔵茂房、四代平蔵茂朝まで長崎代官を勤めた。

初代平蔵政直は、博多の豪商末次興善の子で、長崎に屋敷を構え、安南や台湾などで貿易を行うなど朱印船貿易商として巨財をなした。

かたわら長崎代官村山等安と抗争、元和三年（一六一七）失脚に追い込み、代わって長崎代官に任じられた。

さらに寛永五年（一六二八）以降、台湾でオランダ総督ヌイツと抗争（台湾事件）、そのようななかの寛永七年（一六三〇）五月二五日没した（法名雲證院殿華嶽淨高居士）。一説に口封じのため斬殺されたという。

二代平蔵茂貞は、初代平蔵政直の子で（母は名前不詳、法名智勝院殿天桂永壽大姉・元和二年四月二一日没）、寛永七年（一六三〇）長崎代官に任じられると父平蔵政直以上に辣腕を振るい、末次家の地位を不動のものとしたが、正保三年（一六四六）没した（法名永安院殿通玄宗徹居士）。妻は先妻（名前不詳、法名香林院殿月桂永昌大姉・寛永三年五月二日没）、後妻（名前不詳、法名長福院・元禄八年八月一三日没）であった。

三代平蔵茂房は、二代平蔵茂貞の子で（母は香林院）、正保四年（一六四七）長崎代官に任じられたが、慶安二年（一六四九）致仕、寛文九年（一六六九）閏一〇月二日没した（法名皆春院昨非不干居士）。

四代平蔵茂朝は、二代平蔵茂貞の子で（母は長福院）、三代平蔵茂房の弟である。

慶安二年（一六四九）長崎代官に任じられたが、延宝四年（一六七六）手代陰山九太夫らの密貿易が発覚、四代平蔵茂朝とその母長福院は資金を投資していたことを咎められ、茂朝（四三歳）とその子平兵衛（一〇歳）は隠岐国に、長福院（六四歳）とその孫で、平蔵茂朝の子三十郎（三歳）らは壱岐国に流罪となり（末次事件）、同家は断絶した。

この会は個人会員と法人会員の皆様により運営されています

小野原本店　浜屋　メモリード　十八親和銀行　長崎バス　文明堂総本店　みろくや　福砂屋　松翁軒　森谷商会

春徳寺墓地には二代平蔵茂貞（永安院）とその妻（香林院）の墓碑、不明墓碑（瑞光院）の墓碑三基が、建仁寺（京都市東山区）の塔頭両足院墓地には、二代平蔵茂貞（永安院）とその妻（香林院）の墓碑、三代平蔵茂房（皆春院）の墓碑三基が現存する。

瑞光院墓碑

この春徳寺墓地の不明墓碑については、墓碑に「瑞光院殿壽岩淨永大姉寛文九己酉載十月十九日」と刻まれて、三代平蔵茂房の妻と四代平蔵茂朝の妻の二人が考えられるが、三代平蔵茂房の妻については、両足院の『月牌簿』にその名前がないことから茂房は、生涯独身であったと考えられる。

末次家墓地（両足院内）

一方、四代平蔵茂朝の妻については、『犯科帳』に記載されている末次事件の処罰者のなかに四代平蔵茂朝妻としてその名前がない。

しかし、わずか三歳の三十郎でさえ壱岐国に流罪になっているのに、茂朝の妻が処罰されないのは考えられない。

『犯科帳』によれば三十郎は、壱岐国到着後間もない六月六日に病没しているので、処罰は三歳の幼児といえども容赦はなかったのである。

以上のようなことから瑞光院は、四代平蔵茂朝の妻で、寛文九年（一六六九）すでに没していたので、『犯科帳』にその名前がないのだと考える。

三、城ノ古址

春徳寺後山の城ノ古址は、かつて長崎氏の城砦であったと伝えられる。岩山で石材は城ノ古址石と呼ばれ、住宅や墓石などの資材として盛んに切り出された。

しかし、龍頭巌とその一帯は、石材を切り出すことは、ずっとタブーとされていた。

寛永七年（一六三〇）長崎代官末次二代平蔵茂貞は、亡父初代平蔵政直の墓碑を建立するために龍頭巌を掘削させたところ鑿を打込んだ岩面から鮮血が滲み出たという。

石工の報告に色を失った茂貞は直ちに工事を中止したというが、現在でも、不動堂内の不動明王の背後の岩壁には政直の「雲證院殿華（以下、判読不能）」の法名が刻まれている。

城ノ古址・不動像（左）と不動堂（右）

参考文献
『新長崎市史・第一巻』長崎市
二〇一三年　六三三～六三九頁

第五回長崎学公開講座
第一部発表要旨
フルベッキと長崎

野田　和弘

一、生い立ち

グイド・フルベッキは、一八三〇年オランダのザイストで生まれ、敬虔なルター派教徒の家庭で育った。以下、その生涯について井上篤夫著『フルベッキ伝』をもとに記述する。

少年時代から詩や音楽を好み、仏語、独語、英語が堪能であった。二〇歳の時ユトレヒトの工業学校で機械工学を学んだ。

一八五二年、二二歳のときに単身アメリカに渡り、ウィスコンシン州やアーカンソー州で機械工事関係の職に就いた。二四歳の時、コレラに罹ったが一命を取りとめた。このとき、病床で外国での伝道に志を固めたと思われる。

フルベッキ肖像
（長崎歴史文化博物館収蔵）

一八五六年、ニューヨーク州オーバン神学校に入校、一八五九年三月、二九歳で同校を卒業した。

同時に、アメリカ・オランダ改革教会が日本での宣教のため、日本に派遣する三人の宣教師の一人に選ばれた。オランダ語が出来ることが合格の要因でもあった。出発に先立ちマリア・マニョンと結婚した。

同年五月妻マリアを連れ、他の二人の宣教師と共にニューヨークを出航、上海でマリアを一時待機させ、同年（安政六）一一月七日長崎に到着した。

二、長崎での生活

まず長崎市中の民家を借り、同年末マリアを呼び寄せた。

翌安政七年（一八六〇）一月、長女エマ・ジャポニカが生まれたが二週間

後に死亡、稲佐悟真寺の国際墓地に埋葬した。

長崎では日本語の習得に努め、庄内藩酒田出身で蘭学者の本間郡兵衛らに日本語を学んだ。

文久元年（一八六一）春頃から、唐通事の何（が）礼之助、平井義十郎や佐賀藩士本野周造ら数名に一年を通じて英語を教えた。

これを契機に何礼之助と平井はフルベッキに師事し、互いの交流は長く続いた。

同年一一月、崇福寺の広福庵に転居した。

更に元治元年（一八六四）七月、大徳寺境内に転居し五年間住んだ。

同年八月、長崎奉行所から語学所の英語教師就任の依頼があった。語学所では何礼之助と平井が学頭を務めており、彼らの推薦もあったと思われるが、幕府は英語、蘭語、仏語が出来るフルベッキに大いに期待していた。

語学所では週五日、毎二時間、英語と数学を教えた。年俸は一二〇〇ドル（当時一ドルは一両と換算）と高額であった。

その後語学所は、済美館、広運館と名称も内容も変わっていくが、フルベッキは、明治二年（一八六九）東京に招聘されるまで、五年間教師を続けた。

三、致遠館の設置

佐賀藩は、幕末には藩をあげて西洋知識の吸収に努めた。この結果、もはや蘭学ではなく英学であり、そのために英語を学ぶ必要性を知った。

佐賀藩蘭学寮指南役の大隈重信は、副島種臣らと共に早くから長崎で英語を学び始めた。この時フルベッキと関係ができたものと思われる。

慶応三年（一八六七）一二月佐賀藩は、英学研究を拡充させるために学問所を開設し、フルベッキを教師に雇用した。場所は佐賀藩諫早家長崎屋敷（現長崎市五島町）に設けられ、名称は蕃学稽古所とされた。最初の学生数は三〇名で、副島と大隈が学頭に就いた。

フルベッキは済美館と掛け持ちであったが、一日おきに来て二時間の授業を行った。

明治元年（一八六八）九月に致遠館と改称されたが、翌二年三月フルベッキが東京に招聘され、また学生二七名が東京での勉学を命ぜられ転出したことなどで、致遠館は閉校となった。

致遠館は一年半の短期間であったが、その授業は画期的なものであった。学生たちは自由に質問でき、教師と学生は一緒になって議論したのである。

またフルベッキは、アメリカ独立宣言書も教材に使用した。学生たちは英語を学ぶと同時に、民主政治の理念や制度も学んだのである。

「致遠館学生との集合写真」（部分）　中央がフルベッキ　明治元年か２年頃。場所は上野写真館と推定される。（長崎歴史文化博物館収蔵）

四、明治政府の招聘

明治二年二月フルベッキは、明治政府から開成学校（後の東京大学）の開設準備と教頭就任を要請された。そこで同年三月、一〇年間住んだ長崎を離れ上京した。

開成学校では教頭として学校の整備、教育内容の充実に努めた。

同時に明治政府の政治顧問的立場となり、政治、法制度、教育など多岐に亘る分野で助言を行い、日本の近代化に貢献した。

明治一〇年（一八七七）頃からは宣教師本来としての活動に注力し、キリスト教の伝道に努めたが、明治三一年（一八九八）東京赤坂の自宅で心臓麻痺のため急死した。享年六八。墓は東京都港区青山霊園外国人墓地にある。

参考文献
井上篤夫『フルベッキ伝』（株）国書刊行会二〇二二年
岩松要輔「化学・技術の推進英学校・致遠館」（杉本勲編『近代西洋文明との出会い』所収）思文閣出版一九八九年

第四回長崎学公開講座
第二部発表要旨
『長崎談叢』の創刊者、藤木喜平

大田　由紀

『長崎談叢（だんそう）』は昭和三年（一九二八）五月発行の第一輯（しゅう）から、平成二七年（二〇一五）一〇月の第一〇〇輯まで、およそ九五〇編の論考が発表され、多様なテーマは長崎の郷土史研究の礎となった。

創刊したのは藤木喜平。藤木博英社、浜屋百貨店、長崎グランドホテルなどを開業、長崎の代表的な経済人として知られた人物である。

藤木は明治二二年（一八八九）福岡県八女市に生まれ、高等小学校卒業後、長崎の紙問屋に奉公した。印刷に興味を覚え、二二歳のときに独立して藤木博英社を創業した。妥協を許さない仕事熱心な性格で、同社を長崎の代表的な印刷会社に成長させていった。

印刷業は地域文化と密接な関係がある。長崎学の祖といわれた古賀十二

郎との縁を得て、長崎の郷土史に関心を持つようになった。古賀のもとに通い、仲間も得た。

当時長崎には、郷土史研究の雑誌はなかった。藤木は「長崎にふさわしい史的研究の雑誌」を発刊したいという思いが高まっていった。同志の神代祇彦に編集長を依頼、仲間と相談しながら準備を始めた。

原稿は長崎三学者といわれた古賀、県立長崎図書館長永山時英、長崎高等商業学校教授武藤長蔵をはじめ、地元の研究家の論考一三編がすぐに寄せられた。掲載された論考は中央の学会からも注目され、創刊号は瞬く間に完売となった。藤木は印刷技術も紙質も内容にふさわしいものにしたいものと願い、採算は考えなかった。

談叢の創刊が契機になり、昭和三年六月七日長崎史談会が誕生した。談叢は藤木個人の発行としてスタートしたが、のちに長崎史談会発行の会報となり、会員の研究発表の場となった。藤木自身が論考を発表することはほとんどなかったが、多忙な業務のなか、率先して史跡巡りや講演会などの世話役を引受けた。

藤木喜平（古賀十二郎一周忌の写真）66歳

発会してまもなく、国宝（当時）の福済寺（筑後町）で史談会主催の普茶料理賞味会が開かれた。途中、台所の煙突から火が噴出しているのに気づいた藤木は、シャツ一枚になって屋根にかけ上り水をかけて消火した。寒中のことで、あとで震えながら熱燗で冷えた身体を温めたという。福済寺は原爆で焼失したが、国宝の恩人と語り草になった藤木のエピソードである。

戦後は史談会幹事長、会長も務めた。昭和五七年（一九八二）九二歳で死去。史談会以外の文化活動にも理解を示し、援助を行った。長崎屈指の経済人は、屈指の文化人でもあった。

参考文献
神代祇彦『藤木喜平翁評伝』博友社一九六五年

第五回長崎学公開講座 第二部発表要旨

西洋医学と阿蘭陀通詞

福沢　道夫

西洋医学が初めて日本に伝来したのは、カトリック宣教師による南蛮医学だった。

しかし、江戸幕府のキリスト教禁令以後は、南蛮医学に代わり出島のオランダ商館医から紅毛医学（オランダ医学）がもたらされた。

当時の日本の医療は、中国から伝わった漢方医学が中心だった。医師たちは西洋医学が伝来すると、漢方医学にない生薬や刀傷に有効な外科治療に注目した。

江戸時代初期、長崎や江戸の医師たちは、阿蘭陀通詞を介して、来日した商館医から外科の医療技術や薬の調合法を学んだ。伝授された医術は、医師たちによって紅毛外科として広まった。

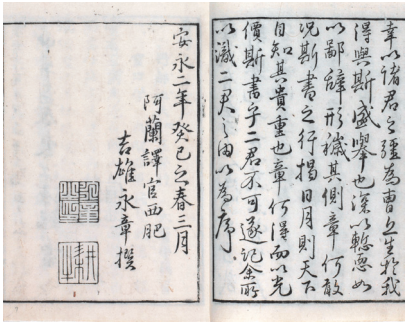
出島旧外科部屋跡付近

長崎には、オランダ船によって、多様な薬種や蘭訳医学書がもたらされた。オランダ語に熟達した阿蘭陀通詞の中には、商館医や蘭訳医学書から蘭方医学の知識や医療技術を学んで、医学の研究をする人も出てきた。

本木良意は、杉田玄白が安永三年（一七七四）に著した『解体新書』の八六年前になる天和二年（一六八二）に日本で初めて解剖書を翻訳した。楢林鎮山は、蘭訳外科書を翻訳し、楢林流外科の指導書にまとめた。吉雄耕牛（永章）は、歴代の商館医から蘭方医学を学び、長崎や江戸で多くの門人を育てた。また、『解体新書』に序文を記した。

彼ら阿蘭陀通詞は、日本における西洋医学の道を切り開いたパイオニアだった。しかし、彼らの業績が広く一般に知られる事はなかった。

明治二年（一八六九）福沢諭吉は、杉田玄白が亡くなる三年前の文化一二年（一八一五）八三歳の時に記した回想録の写本『蘭東事始』を翻刻して、『蘭学事始』の表題で刊行した。さらに、第一回日本医学会総会が開催された明治二年（一八六九）に再版して、広く世に紹介した。



吉雄耕牛による『解体新書』序文（長崎歴史文化博物館収蔵）

この事により『解体新書』が西洋医学など蘭学の始まりとして、一般に周知される要因となった。

一方、『解体新書』に先立つ阿蘭陀通詞たちの訳業はあまり世に知られることがなかった。

参考文献
新村　拓『日本医療史』吉川弘文館二〇〇六年
大島明秀『蘭学の九州』弦書房二〇二二年